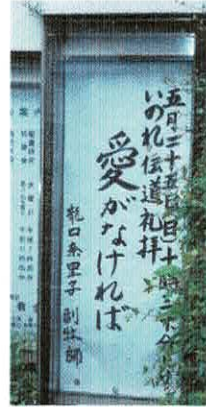


春の伝道礼拝第3回 (5月25日)

愛がなければ

龍口 奈里子



申命記 第7章6～8節

コリントの信徒への手紙Ⅰ第13章1～13節

コリントはアテネの西、ペロポネソス半島の付け根に位置し、南北の交通の要所であり、人も物流も集まってくる商業の中心地でした。おのずと貧富の差があり、異文化・異宗教が町にあふれていました。ここにパウロは「第二伝道旅行」の際、教会を建て、一年半にわたり伝道をしました。だからこの手紙はコリント教会とパウロとの私的なやり取りであるとも言えますが、パウロはこの手紙の冒頭でこう述べています。「コリントにある神の教会へ、すなわち、至るところでわたしたちの主イエス・キリストの名を呼び求めている

るすべての人と共に、キリスト・イエスによって聖なる者とされた人々、召されて聖なる者とされた人々へ。」この手紙はすべての教会にある人々に宛てて書き送っている手紙として読むべきであると思います。

今回の伝道礼拝のテーマは「互

いに愛する」です。キリスト教が大切にしている「愛」。しかしそれは自分一人で成立するものではなく、「互いに」という関係が必要であると、聖書の御言葉から既に二人の牧師が語られました。

最近のニュースで「デートDV」という言葉を皆さんも耳にされていると思います。交際相手又は元交際相手からの暴力のことをいいます。私は日頃女子大の若い女性たちと接しているので、身近な問題としてこの言葉をよく聞きます。元彼が家の前にずっと立っているとか、何回か口をきいただけで付き合ってもいないのに変な電話をかけてくるとか。そのような独りよがりの、一方的な愛し方が現実の社会の中で横行しているよ

うに思います。私たちの「愛」というのは、「支配」や「暴力」にいたも簡単にすり替わってしまうものなのです。愛ゆえに人を傷つけてしまうこともあるのです。そういう意味で、「互いに愛する」というのは本当に難しいことだと思います。

パウロがいた時代のギリシャでは「愛」は3つの言葉に分かれます。男女関係における愛は「エロース」、友人同士の愛は「フィリア」、そして新約聖書で最も重要な単語として出てくるのが「アガペー」の愛です。これは無償の愛、イエス・キリストによって示された、神から与えられる愛のことです。エロースの愛はいつか薄れるでしょう。フィリアの友愛も途切れることがあります。しかし、これは本田哲郎神父が言っていることですが、アガペーの愛は、「相手がだれであれ、自分と同じように、大切にしようと思いつける限り、薄れも途切れもしない愛である」というのです。

相手がだれであれ、自分と同じように、大切にしようと思いつける限り、薄れも途切れもしない愛である」というのです。

ように、大切にしようと思いつける限り、薄れも途切れもしない愛、それがアガペー、神の愛です。

アガペーの愛をもっともよく表している言葉はヨハネによる福音書3章16節です。

「神は、その独り子をお与えになつたほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」

あるいはヨハネの手紙Ⅰ4章11節に、私たちは愛されている者だから「私たちも互いに愛し合うべきです」とありますが、この愛もアガペーです。

今日読んだコリントⅠ13章でパウロが述べている愛にもすべてアガペーが用いられています。アガペーを用いているということは、パウロはここで、神の愛とは何かを語っているのでしょうか。しかしおもしろいのは、パウロは神の愛を述べるだけではなく、そこから私たちが行うべき具体的な愛についても教えていることなのです。

「愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益

を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。」

私は結婚式で司式をするとき、この十の愛の教えの中で、たった一つでもこれはやっています、と言え人は手を挙げてください、と言うのですが、だれもいません。

この愛を、キリストと置き換えてみると、なぜ私たちがこのことをできないのか、よくわかります。

「キリストは忍耐強い。キリストは情け深い…」

この十のアガペーの愛を私たちに身をもつて示してください。たのは、主イエスご自身であり、具体的には十字架の愛なのです。

でもパウロはこれらの愛について何かお題目のように並べているわけでもないし、人間には到達できないような崇高なものだとも述べていません。

パウロは7節でこう続けます。「すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。」パウロは特にこの7節を強調して

いるように思います。互いに対立する時には、「まずお互いに我慢してみよう。それができなければ、お互いに相手を信じあつてごらんさい。それでもだめなら互いに希望をもつてみる。そしてついには、お互いがすべてに忍耐してごらん、そうすれば、(4節に戻つて) 忍耐強くなれるし、情け深くなれるし、ねたまないだろう」と言っているように思うのです。

「すべてに耐える」の「耐える」とは、ギリシャ語ではマクロシメオーといい、元々は「相手のために長い間苦しみ耐えることができる」という意味です。パウロは同じ言葉をローマの信徒への手紙8章23節で、「うめきながら待ち望む」と言っています。アガペーとは、互いに、長い間、相手のために、うめきながら耐えて、希望を持つて、信じて、待つことだというわけです。

主イエスもパウロも、愛について述べているときは、旧約聖書の愛の概念の影響が必ずあるわけですが、旧約聖書では「愛」をどの

ように言っているでしょうか。第一に挙げられるのは、主イエスがもつとも大切な教えだと述べられた申命記6章5節でしょう。「あなたを心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。」この「愛しなさい」はヘブライ語でアハバー、親が子を愛する所の自己犠牲的な愛を意味します。

また今日読んだ申命記7章7節以下の愛もアハバーです。神がイスラエルを愛するのは、イスラエルの民に愛される価値があるからではなく、神が無条件に愛する、一方的に愛したからだ、という、この愛もアハバーです。

パウロが語る愛も、旧約から流れている愛に原点があるわけですが、ただ今日の箇所、「愛がなければすべては無駄」という時のアガペーは、具体的に、信仰に生きる者の生き方としてアガペーの愛を説いているのです。単に人にやさしいとか、思いやりがあるとか、暖かいものであるというだけでは十分ではない愛なのです。それは、私たちがイエス・キリストを通して

て、神の愛によって、新しくされているから、私たちも主にならつて行えるアガペーの愛なのです、隣人を愛して生きること、互いに愛すること。もし私たちの生き方の中にその愛がなければ、一切は無に等しい。どんなに素晴らしい業績も、名譽も、奉仕も、信仰もすべて、無駄であるとパウロはいうのです。

本来私たちは、愛される資格も価値もない。ただ無条件に主イエスの十字架の愛を受けて、愛された者へと作り変えられた。だからこそ、「すべてに耐える」(マクロシメオー)、「相手のために長い間苦しみに堪えること」ができるし、相手を愛して、希望を持つて、信じて待つことができるのです。

13章の最後にはこうあります。「それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。」キリストにつながつて、愛を互に行つていきますようにと祈りたいと思います。

(出席31名。文責・編集委員会。要約担当・島野三千代)